武蔵野日曜集会

聖霊の業
――ヨハネ伝第14章25～31節――

１９９５年７月９日
小池辰雄

助主をつかわす　本来の姿に回復　平安を遺す　祈入が棄身　福音の行者

【ヨハネ14・25～31】

25 此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、26 助主、即ちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。27 われ平安を汝らに遺す、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、汝ら心を騒がすな、また懼るな。28 「われ往きて汝らに来るなり」と云いしを汝ら既に聞けり。もし我を愛せば父にわが往くを喜ぶべきなり、父は我よりも大なるに因る。29 今その事の成らぬ前に、これを汝らに告げたり、事の成らんとき汝らの信ぜんためなり。30 今より後われ汝らと多く語らじ、この世の君きたる故なり。彼は我に対して何の権もなし。31 されど斯くなるは、我の、父を愛し父の命じ給うところに遵いて行うことを世の知らん為なり。起きよ、率ここを去るべし。

●助主をつかわす

25 此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、26 助主、即ちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。

非常に含蓄のある聖言です。聖霊を特に「助主」という言い方は非常に大事な言い方です。助けてくれる。「聖霊」というと何か少し観念的になりますけれども、「助主」といわれると非常に人格的な響きになってくる。ここには十字架のことは書いてありませんが、我々は十字架を土台にして聖霊を受けるわけです。

「我には受くべきバプテスマあり」

と仰ったのは十字架のことです。

「そうしたら、お前たちに聖霊をくだす」

と言われた。即ち「助主をつかわす」ということです。正直、我々の生活で何といっても十字架の土台の助主、聖霊は驚くべき霊で、我々に何でも、その人に必要な能力、力を与え、

業をなさしめる。信仰の世界は単なる感情ではない。昔は、信仰というのは多少、感情的に受けとっていましたけれども。神業の原動力がこの聖霊なんです。

我々はもともと「霊止」です。これは大言海に書いてある。神霊の止まっているのを霊止という。「魂之霊」とは「たましひ」と読む。

霊的なキリストは天界に居られる。けれども、それはこの助主、聖霊として我々の中に入ってくださる。

「われ汝のうちに在り、汝わがうちに在り」

という相互関係、内在関係です。「神交」の世界は内在関係なんだ。信じ仰いでいるのではない。「信仰」という書き方はダメです、我々は一般のありきたりの概念を突き破って進んでいかなくては。

鎌倉時代の初期に榮西禅師というのがいました。臨済宗の開祖です。榮西はこう言っている。

「大いなるかな心や。
天の高き極むべからず、而るに心は天の上に出づ。
地の厚さ測るべからず、而るに心は地の下に出づ。
日月の光は踰ゆべからず、而るに心は日月光明の表に出づ。
大千沙界は窮むべからず、而るに心は大千沙界の外に出づ。
それ太虚かそれ元気か。
心は即ち太虚を包んで、元気を孕むものなり。
天地我を待って覆戴し、日月我を待って運行し、
四時我を待って変化し、万物我を待って発生す。
大いなるかな心や。」

これは凄い言葉だ。これに匹敵する言葉はちょっとヨーロッパにはない。「心」というのは「魂」「霊」と同じ言葉です。そういう霊の世界です。神霊といってもいい。我々は、霊止は、神の霊がもともと止まっている。

「神はひとをその似姿に造った」

という。あの「似姿」という訳はよくない。

「神の相に即して造った」

ということです。神の内的な相に即して造られた。だから、人間は本来、霊止である。我々は本来、神霊の止まっている者です。榮西禅師のこの言葉はその大自覚をいきなりもっている。

●本来の姿に回復

キリスト教ではすぐ「罪、罪」と言う。そんなにすぐ「罪、罪」なんて言うことはない。

人間はサタンに誘われてそれてしまったけれども、本来は神霊の止まっている者です。自分というものを本当に見れば、それは本来、神の姿である。それがサタンにいざなわれて神を見失ってしまって、サタンの手下になった行動をすることが多いから、「罪びと」なんていうことになる。そんなことではないぞと、その回復をしてくださるのが、我々にその本質の自覚をさせてくださる土台が、キリストの「十字架の贖罪」と「聖霊」です。だから、十字架の贖罪と聖霊を本当に受けとれば、本来の姿に回復される。これは誰でもが無条件に受けとれる。

聖霊のことをキリストは「火」と言われた。

「火を投ぜんがために来た」

とキリストはルカ伝12章で言ってらっしゃる。この火を受けとらなかったら、クリスチャンなんて言ったって、つまらんです。信じているのではない。体受、体(からだ)で受けとっている。

「私は信仰なんかありません、私は体受してます」

と言う。体(からだ)で受けとる、全存在で受けとる。信じてはいない。この「信ずる」という言葉がどうも躓きになる。十字架の贖罪というキリストの行為を外側から信じたって何になるか。受けとらなければダメです、体受しなければ。そういう概念の革命を起こさなければ、従来のキリスト教の信仰ではダメなんだ。

体受する。体(からだ)で受けとる。これは本当に力がくる。いわゆる信仰ではダメです。全存在で受けとる。それは祈りの世界で祈り入るわけです。キリストの中に祈入する。自分の身体を投げ入れてしまう。私の祈りは簡単なんです。魂の奥から

「主さま！」

と叫ぶと――なにも声をだすわけではないけれども――キリストの中に入ってしまう。

「ああ、ありがとうございます。アーメン、ハレルヤ！」

と、その他に言いようがない。そうすると、力が来る。これは御霊の力だ。だから、その時にやろうとすることに力がくる。皆さん、何をなさっていてもそれを本当に自分で体験なさると、

「いやこれは本当にありがたいはなしだな」

ということになる。我々がすること為すことは全部その原動力はこの十字架・聖霊の所からやってくる。聖霊の内容は凄い。その人にふさわしいものは何でもやってくる。そして、力を与える。くたびれない。私は

「あぁくたびれた」

なんて思うことはまずない。眠くはなりますよ、けれども、

「疲れた。嫌気がさした」

なんてことはない。

大人物というのは、本当に真理が体現するような人でなければダメなんだ。この福音を

受けとっている者は――我々は人間としては小さいけれども――しかし、質的にはみな大人物なんです。これは大いに自覚してください。「罪びと」なんて言うのはやめた方がいい。大人物、本当の霊止なんだ。キリストの霊が止まっている。

「クリスチャンではない。私は霊止です。キリストの霊が止まっている人間ですよ」

と。キリスト教では、二言目には

「罪びと、罪びと」

と言う。そんなことではダメだよ、宗教改革をしないとね、第二の宗教改革を。天界でルターが喜んでいる。ゲーテも喜んでいる。どうぞ、そういうことで、楽しく勇ましくやってください。

●平安を遺す

26 助主、即ちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、

その通りです。何でも、聖霊の内容は凄いから。

又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。

「思い出させる」とはおもしろい。

「ああ、そうだ、その通りだ」

と、いろいろな体験をしながら思い出させる。ドイツ語の「エァインネルン」という語は「内化させる」という言葉です、「思いだす」という言葉が少し弱いくらいです。「内側に現象させる」ことです。聖霊を与えて何でもやらせるし、何でも思い出させる。

27 われ平安を汝らに遺す、

この言い方は、本当に具体的な内容があるから、「平安を遺す」なんていう言い方をする。

「助け主という平安の主体をお前たちに遺す」

ということです。

この「平安」というのは、「神・キリストと我の関係」です。平安のないところには平和はない。「平和」というのは「人間相互の関係」、横の関係です。みな、

「平和、平和」

と言うけれども、ダメだよ、まず平安がなくては。神・仏との関係がついているのを平安という。仏教でもいいですよ。魂の縦の関係が成り立っているのが平安です。キリストさまとの関係が成り立っていると、キリストの力がくるから、愛がくるから、その愛が流れて人を愛するということになる。愛せざるを得ない。「愛する」とは「人助けをする」ということで、感情ではない。

「何か知らんけれども、あの人に接すると力がきます」

ということになる。それはまずこの平安がなければ、人と人の関係は成り立たない。

「敬天愛人」

という。しかし、敬天の基を西郷南洲は言わなかったけれども、「敬天」ができるのは、まず天から力がくる、愛がくる、生命がくるから、敬天ができる。人間がこっちから

「敬天、敬天」

なんて言ったらくたびれてしまう。何でも力は上から、霊界からくる。霊界から来る本願の力、本願の助力を受けとってはじめて、その人に必要なことが何でもできるようになる。それだから、楽しくてうれしくてしょうがない、ありがたくてしょうがない。

小学校から大学の先生にいたるまで、そういう縦の関係をもっている人がきわめて少ない。情けない。いくら

「教育、教育」

なんて言ったって、それでは本当は日本の教育は成り立たない。教育の基はそういった宗教心なんです。小学校から大学にいたるまで、先生方が仏典なり聖書なりを読まなければダメなんだ。何といっても、欧米は伝統的にキリスト教が流れていますから違うんだ。フランチェスコ、ダンテ、ルター、ああいう連中はその世界をしっかり世に現して体現して行ったからね。皆さんは自ずから伝道せざるを得ない。助け主が力を与えてくださるから。

●祈入が棄身

「恵福なるかな、平和ならしむる者」

という。平和ならしむるためには、平安がなければ成らない。平安をいただいていると、平和ならしめることができるわけです。平安というとなにか静的な感じがするが、これは力を持っていますから間違わないように。平安というのは内的なもの凄い力をもっている。

わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、汝ら心を騒がすな、また懼るな。

「はい、騒ぎません、恐れません」と答える。

28 **「われ往きて汝らに来るなり」と云いしを汝ら既に聞けり。**

「往きてまた来る」というのは

「また聖霊としてやってくるぞ」

ということです。

もし我を愛せば父にわが往くを喜ぶべきなり、父は我よりも大なるに因る。

「どうぞ、いらっしゃってください。御霊を力として行きますから」

と。本当にキリストを愛しているなら、キリストが天界にいらっしゃることを、

「はい、大丈夫です、御霊が来ますから。御霊をあなたが遣わしてくださるから、どうぞ、天界へいらっしゃってください」

と、そう言うべきであるとキリストが言っている。

29 **今その事の成らぬ前に、これを汝らに告げたり、事の成らんとき汝らの信**

ぜんためなり。

汝らが受けとるためであると。

30 今より後われ汝らと多く語らじ、この世の君きたる故なり。彼は我に対して何の権もなし。

「この世の君」とはサタンのことです。

「私が言うと、サタンがやってきていろいろかき乱すから」

と、こういうことらしい。

31 されど斯くなるは、我の、父を愛し父の命じ給うところに遵いて行うことを世の知らん為なり。起きよ、率ここを去るべし。

ここに「行う」と書いてある。業の世界です。

一般に「信ずる」という言葉も内的な業なんです。魂がキリストの中に自分を投げ入れる。これが、私が言うところの「信ずる」です、内的な業なんです。キリストの中に自分を棄身する。どこに棄身するかというと、キリストの中にです。

「我もなく世もなし。われキリストの中にあり」

という。棄身なんだ。本当の信は棄身なんだ。キリストの中に自分を捨てる。そうすると、力が来てしょうがない。ありがたくてしょうがない。祈りの世界でも、これを祈入という。キリストの中に祈入する。この祈入が棄身なんです。祈りとは、何か事柄をお願いするのではない。私は事柄をお願いしない。言わなくたって、キリストはいいようにしてくださるから。まず大事なのは、自分をキリストの中に入れることです。寝るときに、いつも私は端坐して、その簡単な祈りをして、そして

「お休みなさい。あなたの懐の中で寝ます」

と。眠れないなんてことは絶対にない。

●福音の行者

あなた方も私も終りなき生命ですよ、「永遠の生命」をいただいているのだから。

「いくつまで生きるか」

なんて考える必要はない。終り無き生命なんだから。大いに楽しく勇ましくやってください。

「御意を行う者でなければ天国にいけない」

という。信ずるではダメだ、行わなければ。

「信仰のみの信仰」

なんて言うが、行わなければ、仰ぐではダメだ。本当は行の方です。

「それでは、カトリックではないか。行為を問題にするのはカトリックだ。プロテスタントは行為を問題にしないで信仰だけだ」

なんて、大体、普通はそんな言い方をしている。

ローマ書8章に、

「1この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。2キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。3肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。4これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。

モーセの十誡から始まっているところの「律法」を守ろうとすると、それはくたびれてしまう。

5肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。肉の念は死なり。6霊の念は生命なり、平安なり。7肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、8また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。9然れど神の御霊（キリストの御霊）なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん（居る）。

「居らん」という訳し方は私は嫌いだ。「霊に居る」とはっきり言った方がいい。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。10若しキリスト汝らに在さば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん（在る）。

「在らん」ではなく、

「霊は義によりて生命に在るなり」

です。ギリシャ語で未来形で書いてあると、みな訳が言葉に従って「あらん」なんて訳す。そうではない。その気持は「ある」ということです。これは私は勝手な改訳をしたいくらいです。「在らん」なんて言われると、読んでいて力がこない。信仰の世界は直説法・現在なんです。可能法ではない。

世を去る前に私は烈々たる文章を書いて、置き土産にして往きますよ、今のキリスト教界は情けないから。

……14すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。15汝らは再び懼を懐くために僕たる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父よと呼ぶなり。16御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。17もし子たらば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る。」（ロマ8・1～17）

パウロは

「キリストの苦難の欠けたるを補う」

なんて、そんな言葉まで言っている。

ヨハネ伝14章にもどります。

31 **されど斯くなるは、我の、父を愛し父の命じ給うところに遵(したが)いて行うことを世の知らん為なり。起きよ、率(いざ)ここを去るべし。**

キリストの御霊の力で我々は行う。行ずる信者でなければダメなんだ。行者なんです。福音の行者です。それは御霊の力で何かをやっていると、ありがたくて楽しくてしょうがないから。皆さん、何をなさっていても、それを体験しなければね。

何か本を読んでも、その本の届いていない世界を、その奥を読んでしまう。トルストイを読もうが、ゲーテを読もうが、ユゴーの『レ・ミゼラブル』を読もうが、ミルトンの『パラダイスロスト』を読もうが、何を読もうが、我々はキリストの霊の光で読んでいるから、読み方がちがってくる。そんな読み方は聖霊がなければできない。いわゆる普通の研究会なんてものではダメです。文献的な研究をなにも私は軽んずるわけではないけれども、本当の読み方というものは身体(からだ)で読まなければダメなんだ。その人の境地に自分を入れなければダメだ。ゲーテを読めばゲーテとなる。ノバーリスを読めばノバーリスとなって、また、トルストイとなって、グラッドストーンとなって、ミルトンとなって、読んでいく。これは楽になれるんです、御霊の力は凄いから。それ以上の世界に入っていく。奥を読んでしまう。眼光紙背に徹するとはそのことだ。

「ああ、これは難しい」

なんていうことがなくなってしまう。言葉では難しいこともあるでしょう。けれども、内容的に難しいということがなくなってしまう。

私たちは御霊の力で、十字架・聖霊の恩寵のもとに、それぞれ楽しく勇ましく業(わざ)をして行きましょう。